

第4分科会 通常の学級での取組

すべての子どもが分かりやすい授業と
すべての子どもが所属感を感じられる学級経営

秋田県仙北市立角館小学校 教諭 三浦 ひかり

Ⅰ 実践に当たって

令和4年度で教員として8年目を迎えた。通常学級担任4年、特別支援学級担任3年を経験しているが、通常学級担任をした際、以下のような授業中の子どもたちの困難さや学級経営上の難しさを感じた。

- (1) 指示を聞いて動くことが難しい。
- (2) 板書をノートに写すことが難しい。
- (3) 自力解決の時間に自分の考えをもつことが難しく、学習意欲が低下している。
- (4) 誰かがやってくれるだろうと人任せにしている子どもが多く、学級への所属感が低い。

これらの困難さに対して、これまで特別支援学級の子どもに行ってきた支援が、通常学級の子どもにとっても分かりやすく、所属感を感じるための学級経営にも役立つのではないかと考えた。ここでは、主に通常学級1・4年生で行った実践事例について紹介したい。

Ⅱ 実践内容

Ⅰ 指示の内容と対象の明確化

指示を理解することが難しいのは、教師の指示があいまいで、何をしたらよいのか子どもたちに伝わっていないためだと考えた。以前、特別支援学級の子どもから学習中の指示に対して「命令しないで。」と言われて気付いたことがある。教師にその気がなくても、子どもは命令されているように感じていたことだ。この経験から、指示を出す時には「ここは私が教えます。見ていてください。」「まずは鉛筆を持ちます。」など、子どもたちが今何をどのようにすればよいのか、短く具体的に指示をした。また、「お母さんと先生のどちらの言うことを聞けばいいの。」と混乱した気持ちを伝えられたこともある。支援の必要な子どもたちは、誰の話聞いて行動したらよいのか迷いが生じているようである。「今は、ひかり先生の話聞きます。」「理科の時は〇〇先生の話聞きます。」と指示を聞くべき対象も明確に伝えるように心掛けた。

2 板書の工夫

板書をノートに写すことが難しいのは、どこに何を書けばよいのか子どもたちが分からないためと考えた。1年生はノートへの記入自体初めてであり時間はかかるが、最初にしっかりと身に付けさせたい。「どこに書けばいいですか。」という声に個別に支援していると教師の負担感も大きくなる。

そこで、ノートと同じ形の拡大教具を作成した。

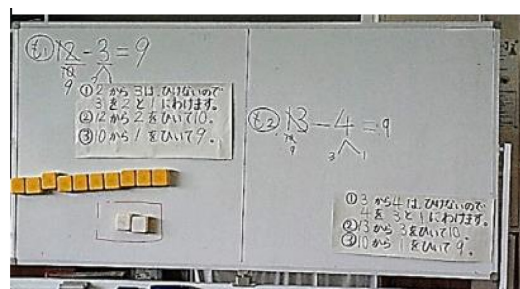
本時のノートの見開き2ページを黒板一面と考え、左側の1ページ目は拡大教具と同じように子どもたちに記入させる。右側の2ページ目は自分で考えて書く部分を増やしたが、教師は文字数をノートとそろえて書くことに留意した。また、「問題」「めあて」「まとめ」「振り



〈ノートの拡大教具とパターン化〉

返り」の流れや、振り返りの視点「よ（よかった）、い（いいなあ）、こ（こんどは）」もパターン化した。これは学校の共通実践事項であった。さらに、次時のために子どもの考えを残しておきたいと考え、ホワイトボードも使用した。

黒板はノートと同じ、ホワイトボードは子どもたちの考えたこととして場を分けるとともに、思考の視覚化、共有化を図った。



〈思考の視覚化と共有化〉

3 自分の考えをもつための工夫と自己決定の場の設定



〈自己決定で自己存在感を高める〉

自分の考えをもつことが難しいのは、子どもたちが既習事項を生かしていないためと考えた。そこで板書の写真を教室の壁面に提示し、自力解決の時間に参考にさせた。また、学習意欲の向上のために、自己決定した解決方法にネームプレートを貼る活動を取り入れた。学習中の自己存在感を高め、所属感を得られるように、これらの方法は道徳科や特別活動でも行った。

4 学級への所属感を高める工夫

(1) 担任との信頼関係づくり



〈毎朝の予定と担任のメッセージ〉

学級の一員としての所属感を感じられない理由の一つは、担任との信頼関係の希薄さだと考えた。そこで、「毎朝のメッセージ」を黒板に掲示した。これは、黒板に書かれている指示や学習内容を自分に関係ないと考えていた特別支援学級の子どもへ続けた手立てである。子どもが、今日の活動に見通しをもち、不安なく活動できるように、また、黒板の情報が役立つことを感じることで担任への信頼感が高まるように、その日の連絡事項や担任からのメッセージを子どもの登校前に掲示した。黒板以外にも、4・5ヶ月先のカレンダーに予定を記入しておいたものも教室に掲示し行事や活動が見通せるように心がけた。しかし、どうしても指導しなければいけない場面もある。その時は、「あなたのことを私はとても好きだけど、やってしまったことはよくて好きではない。」など、私がどの行為に対してどう感じたかを教室外で伝えた。一日を通してその子どもを見守り、帰るまでには必ずその子どもを認める言葉かけを行った。

(2) 友達との信頼関係づくり

学級への所属感を感じられないもう一つの理由は、「みんなで」という意識が低いためだと考えた。そこで、授業中の学び合いの時間を確保し、教えたり教えられたりする機会を増やした。また、当番活動や係活動、学校行事でも友達との信頼関係を強められるように、教育活動全体で「みんなでできたから」と友達との協力を認める言葉掛けをした。特に学級目標の達成に関わる活動で友達と協力できた時には、「ペットボトルにビー玉を入れる」ことをみんなで決め、友達との信頼関係を可視化した。いっぱいに貯まったら学級会を開いてお楽しみ会をすることも約束した。

Ⅲ 成果と今後の課題

Ⅰ 成果

(1) 「指示を聞くことが難しい」について

- ・子どもたちは45分間安定した気持ちで活動に向かえるようになった。行動できることが増えたことで、教師が子どもを認める機会も増え、子どもの自己肯定感が高まったことが、学期末に行うアンケート結果に表れていた。

(2) 「板書をノートに写すことが難しい」について

- ・子どもたちからのノートの記述に関する質問はなくなり、授業内容に向かえるようになった。1年生でも大切な部分に線を引くなどの意欲的な姿が見られた。

(3) 「自力解決の時間に自分の考えをもつことが難しく、学習意欲が低下している」について

- ・自分の考えをもつ子どもが増え、まずは試しにやってみようというチャレンジする気持ちも芽生えた。学習意欲が向上したことは、子どもたちのノートの振り返りに表れていた。ネームプレートの提示は子どもの思考の方法や手段が把握しやすいため、迷っている子どもに「〇〇さんにお助けしてもらおうか。」と意図的に考えを繋げて指名することもできた。

(4) 「誰かがやってくれるだろうと人任せにしている子どもが多く、学級への所属感が低い」について

- ・黒板を見て、子どもたちで考えて行動することができ、教師が子どもを認める機会が増えて、関係はよりよいものとなった。子どもたちは「今日は頑張らないといけないね。」「もうミニトマトにお水あげたよ。」など自分の思いを素直に表現してくれるようになった。
- ・子どもたちが「みんなで」ということを意識するようになった。また、相手の気持ちを考えて話したり、行動したりする場面も増えた。活動が遅れている子どもには、率先して手伝う姿も見られるようになった。子どもたち同士で話し合う場面も増え、学級会で決まった内容もスムーズに活動でき、学級への所属感が高まった。

2 今後の課題

- ・「認め合う」集団から、今後は「高め合う」集団にしていきたい。例えばリーダーを育てるための支援・指導はどうあればよいか考えていきたい。
- ・すべての子どもが分かりやすい授業とすべての子どもが所属感を感じられる学級経営には、細やかな実態把握と個別最適な手立てが必要であり、時間と労力が必要になる。ICTも活用した持続可能な方法を模索していきたい。